

国際的な視点に立ち働く意義を考えられる子どもの育成を目指した教育実践

前カイロ日本人学校 教諭

三重県多気郡多気町立勢和中学校 教諭 東 啓 太

キーワード：在外教育施設，カイロ，総合的な学習の時間，国際理解教育，キャリア教育

1. はじめに

エジプトはピラミッドを筆頭に様々な文化遺産が各都市に点在し、その歴史遺産を一目見ようと観光客で溢れかえっていた。しかし、先の革命後、観光客はエジプトから遠のき、観光業は大打撃を受けてしまった。リスク回避のため外国からの企業進出が減り、海外資金が流入しなくなったエジプト経済は、現在も困窮の域を脱することはできていない。毎年5%～10%ともいわれるインフレにも関わらず、エジプト人の平均収入は横ばい状態が続き、所得格差が広がっているとされている。ピラミッドやルクソールなどを訪れても、観光客はまばらにしかおらず、観光客相手に商売をしているどの商人も口々に、「ムッシュ・クワイエス（景気は悪い）」と言っている。

このように情勢の落ち着かない中、子ども達は表には出さなくても心のどこかで不安を感じているのではないかと思う。そんな子ども達にとって、エジプトが楽しい場所になり、大人になった時にエジプトでの生活が「幸せだった」と心から言えるようにしたいと願ってきた。

2. 研究の動機やねらい

下記(1)、(2)の視点に立ち総合的な学習の時間を活用し、国際感覚を持って働く意義を考えられる子どもの育成を研究の主眼に置いた。

カイロ日本人学校の校歌に「強く正しく、目指すは世界」とある。エジプトで生活をしている子ども達には、将来、世界で活躍できるだけの力がある。そしてその力をさらに成長させてくれる環境にも恵まれている。しかし、この恵まれた状況を生かせるかどうかは、子どもたち自身がエジプトをどのように捉えるかで大きく変わってしまう。

発展途上にあるエジプトには確かに多くの課題が山積している。それを肌で感じる事は、日本から来た子ども達にとってそれほど難しい事ではない。これらの課題の一つ一つを取り上げて、マイナス面ばかりを見るのではなく、エジプトの良さに目を向け、プラスの力に変えていってほしいと思った。そして今すぐには難しくとも、これから先、子どもたちが大人になる成長の過程で、エジプトで感じた課題と自分たちとの関わりを考えられる基盤を作りたいと考えた。

(1) キャリア教育について～日本経済の現状と課題～

過去7年を見てもニート、フリーターの数が合計で280万人にも及んでおり、労働者層が働かないことによるGDP減少、所得税の減少をもたらしている。非正規雇用者が増加するといった雇用環境の変化や「大学全入時代」が到来する中、子どもたちが将来に不安を感じたり、学校での学習に自分の将来との関係で意義が見出せずに、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しないといった状況が見られる。さらに、勤労観・職業観の希薄化、フリーター志向の広まり、ニートと呼ばれる若者の存在が社会問題化している。このことから、国として義務教育段階における子どもたちから勤労観・職業観を養っていく必要があることは自明である。

(2) 国際理解教育について

「国際理解教育は、各教科、道徳、特別活動などのいずれを問わず推進されるべきものであり、この教育（国際

理解教育)を実りのあるものにするためには、単に知識理解にとどめることなく、体験的な学習や課題学習などをふんだんに取り入れて、実践的な態度や資質、能力を育成していく必要がある。指導の在り方としては、国際理解教育が総合的な教育活動であることを踏まえて、「総合的な学習の時間」を活用した取組も考えられよう。」(平成8年『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』(中央教育審議会 審議のまとめ)より)。

3. 研究仮説

国際化が益々加速的に広がっていく現代社会において、キャリア教育において養われる勤労観は、日本国内にだけ利益を求める内向的なものではなく、日本が世界経済の一端を担い、世界各国それぞれに相互利益が伴うものでなければならない。

本研究では、政情不安定下にあるエジプトにおいて、子どもたちに「エジプトを元気にしよう」というテーマを与え、エジプトの新しいお土産品を開発していく活動を通して、子どもたちがエジプトの良さに気付き、国際的視点から職業観・勤労観が養われるのではないかと考えた。

4. 研究内容と方法

(1) 研究の対象とする児童(小学部6年生)

小学部6年生3人(女子3人)が在籍し、4教科以外の授業については小学部5年生5人(男子2人,女子3人)と一緒に複式で授業を行っている。2つの学年が混ざったクラスではあるが、学年に関係なく遊んだり、授業を受けたりすることが出来ている。学習発表会では、お互いに協力しながら劇を作り上げ、参観に来て頂いた方々を楽しませることができた。児童は学習発表会を共に作り上げた達成感を感じる事ができた。

(2) 実態把握

本研究を進めるにあたって、キャリア教育の視点に立って子どもたちの実態を把握するためにアンケート調査を行った。以下が5月に行ったアンケートの内容とその結果である。(抜粋して標記)

キャリア教育アンケート結果(高学年)		
4:いつもしている 3:時々している 2:あまりしていない 1:ほとんどしていない		6年生(平均値)
10	学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。	3
11	自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えていますか。	2.5
12	自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか。	3

〈目標設定〉

以上のアンケート結果(6年生の結果のみ標記しているが学校全体でアンケートは実施した)から以下の年間教育目標を設定した。

学年年間指導目標:学習の目標・計画を立て、その実現のための手段を考え、積極的に努力を重ねることが出来る態度を育てる。

また、上記の目標を下に、研究目標「国際的な視点に立ち働く意義を考えられる子どもの育成」を設定した。

5. 授業実践(総合的な学習の時間)

(1) 単元名「エジプトを元気にしよう」

(2) 単元の目標

エジプトを元気にするためのお土産品の商品開発から販売までの流れを経験することにより、国際的な視点に立った勤労観・職業観を養う。

(3) 授業内容

厳しい情勢下にあるエジプトで暮らす子どもたちが「エジプトを元気にしよう!」という目標を立て、エジプトのお土産品開発を行ってきており、学習の最後には、実際に開発した商品を日本人会主催で開かれる春祭りの場で販売を計画した。本学習では本物のお金を校長（「エジプトを元気にしようを応援する会」）から借り入れる事から始め、利益を生み出すという一連の流れを大切にしている。これは、経済を動かすお金がどのように流れているのかを体感させることを目的としたためである。

〈土山氏講演とアリババ見学〉

単元の初め、どのような商品が観光客に喜ばれるのかを教えるために、現地の旅行代理店エレガントボヤージュの土山氏を講師に招き講演して頂いた。講演の中で、土山氏からエジプト産オリーブオイルを用いた「オリーブ石けん」が観光客に喜ばれるのではないかと教えて頂き、さっそく子どもたちはエジプトで販売されているオリーブ石けんを集めお土産品の開発を始めた。すると、これまでたくさんのオリーブ石けんは販売されているが、お土産品になるような良い香りのする石けんが販売されていないことに気が付いた。

そこで、観光客向けに香油を販売している「アリババ」を見学し様々な香りを嗅がせて頂く中で、ロータスの香りに目を付けた。ロータスはその香りが良い事に加え、エジプト古代遺跡の壁画にもたくさん見られ、エジプトを象徴する花の1つである。考古学博物館の池にもロータスの花が咲いており、ロータスの香りがする石けんを目を付けたところは非常によいアイデアであったと考えている。

〈商品開発〉

しかし、アイデアは決まったが、それを形にしていくことに非常に苦労をした。初めは金銭面の問題があった。見学をさせて頂いたアリババで販売をしていたロータスの香油は50mlほどで25米ドルと非常に高価であった。この香油を使用しているのは原価率が高くなってしまい、利益を出すことが出来なかった。そこで安く質の良い香油を探し、お土産品としてではなくエジプト人が使用する香油を使用することにした。また、オリーブ石けんは比較的簡単に作ることが出来たが、そこにロータスの香りをつけるのに非常に苦労をした。加える香油の量やタイミング間違えてしまえば、石けんが固まりすぎて型に流し込むことが出来なくなってしまう、逆に全く固まらなかったりしたこともあった。何回も何回も試作品を作っては失敗をするという経験を繰り返し、やっとの思いで完成をさせることが出来た。



完成したロータスの石けん

〈春祭りバザー〉

平成26年3月7日（金）に日本人会主催で行われた春祭りで、作ったロータスの石けんの販売バザーを行った。「安全・安心ですよ」と来て頂いたお客さんに声をかけて用意しておいた100個の石けんは1時間ほどで売り切れた。

〈収益金（400ポンド）の使い道〉

売上金から借入金を返金後、約400ポンドの収益金があった。

①寄付

収益金をどのように使うか子どもたちと話し合いをしていたところ、『これまで「エジプトを元気にしよう」を目標にして来ていたので、収益金もエジプトを元気にするために使いたい』といった意見が出された。では具体的にどのように使ったらよいかを子ども達に尋ねたところ、「エジプトを綺麗にする活動をしている人た

ちに寄付をしたら良いのではないか？」といった意見が出された。

自分たちの力で掃除をするには限界があるので、そのような活動をしている人に協力をしたいということであった。

子どもたちと相談の上、マンシュエツナスルでザッパーリーンと呼ばれるゴミ回収をしている人たちの自立支援を行っている団体「Sprit of Youth」へ寄付をした。また、「Sprit of Youth」の方々にリサイクルの大切さについて講演を頂いた。

②学校のために

今回の学習内容は日本の新聞社で取り上げられた。このような活動を後世にも伝えていきたいとの思いで学校に売上金から記念植樹を行った。

6. まとめと今後の課題

開発から販売までの流れを国際的視点に立ち体験的に学ぶことができた。以下に、「児童の感想」と授業実践後のアンケート結果とその分析」を示す。

〈児童の感想〉

- ・また文化も言葉も違うエジプト人にもたくさん買ってもらい嬉しかったです。
- ・春祭りで色々な人が買ってくれて良かったです。これまでの苦労が実ったと思います。
- ・エジプト人も喜んで買ってくれて嬉しかった。エジプト人が「なぜこんなことするのか？」と驚いていた。
- ・お客様が笑顔で喜んで買ってくれたのが一番良かったと思う。
- ・私は初めて商売をやりました。人にお金で買ってもらうという重要さを改めて感じました。今回の経験はとてもいい経験になったと思います。
- ・この授業を通して、物のありがたさや作っている人の思いが分かるようになりました。
- ・エジプトで貴重な経験ができてとても嬉しかったです。エジプトと交流をした大切な思い出だと思います。

〈授業実践後のアンケート結果とその分析（抜粋して標記）〉

5月アンケートと学年末アンケート		5月	学年末
10	学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。	3.0	→ 4.0
11	自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えていますか。	2.5	→ 3.7
12	自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか。	3.0	→ 3.7

項目10から12について、数値に大きな上昇傾向が表れた。これまでの総合的な学習の時間を通して、勤労観・職業観が身につけてきたと考えられる。自己肯定感がつき、苦手なことにも取り組む姿勢がみられるようになってきた。今やっている学習と将来との関係性を感じられるようになってきた。

以上児童の感想やアンケート結果から、研究の目標としていた「国際感覚を持って働く意義を考えられる子どもの育成」は達成されたと考えられる。小学6年生は中学部へ入学、また一緒に学習をしてきた小学5年生は6年生へ進級をする。来年度は今年養った国際感覚を持ってエジプト社会をとらえ、現実社会と自身の目標との相互関係を捉えられる授業実践を行うことで、子どもたちの職業観・勤労観がより発展していくと考えられる。